

ロレイン製鉄所での苦労話『単位系の違い』

西 脇 孝

(株)神戸製鋼所 (USS/コウベスチール勤務)

早いものでオハイオ州クリーブランドの西、エリー湖に臨む、この製鉄所に来てこの9月で3年になる。

ロレイン市は米国五大湖周辺の典型的製鉄都市であり、ここロレイン製鉄所も約100年の歴史を有している。最盛期には一万人を越える従業員を抱え高級条鋼と継目無鋼管の一貫製鉄所として隆盛を誇っていたこの工場も長い鉄鋼不況とUSX (USスチール) の合理化の波の中でわずか三千人の規模に落ち込み、永久閉鎖されるのは時間の問題であった。そこに救いの神(?)として現れたのが、米国での自動車向け棒鋼・線材の生産拠点を捜していた神戸製鋼である。

1989年7月にUSXと神戸製鋼の共同出資による合弁会社『USS/コウベスチール』が発足し、製鉄所の存続を願っていた市民たちはホッと胸を撫で下ろしたわけである。

そういった経緯から、当地のアメリカ人たちは極めて好意的に日本からの派遣技術者を迎えてくれ、つたない英語で四苦八苦しながらもなんとか仕事を進めることが出来るようになってきた。英語での失敗談は枚挙にいとまがないが、本稿では別の観点からアメリカの製鉄所で仕事をすることの難しさを紹介してみたい。

ご承知のように米国で日常的に使われている単位系は我々日本人にはあまり馴染みのないインチ、フィート、ポンド、ガロン、華氏などである。(筆者にとって唯一馴染みがあったのはゴルフ場でのヤード表示であった。)ロレインに来て間もない頃、私は担当する棒鋼圧延工場の騒音の中で必死にアメリカ人作業員から操業上の問題点を聞き出そうとしていた。

『今圧延している製品サイズは?』『圧延する時の温度は?』

『製品冷却用水冷帯の長さや冷却水量は?』

矢継早に出される質問に対しアメリカ人作業員たちは私の顔につばを飛ばしながら大声で精一杯、必死に説明しよ

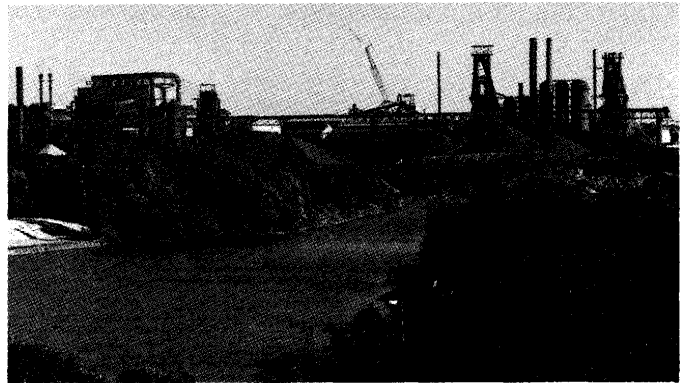


写真 ロレイン製鉄所

うとしてくれた。しかし、言葉のカベに加え相手の説明の中に出てくる単位系を瞬時にメートル法に置き換えて理解することは不可能に近く、お互いの努力にも拘らず非効率なこと甚しかった。

当時の私の英語のヒヤリング能力を50%とすると、もうひとつのハンデである単位系の理解力が50%しかない為、アメリカ人と技術ディスカッションした場合の私の理解度は、 $0.5 \times 0.5 = 0.25$ 。つまり相手の話の僅か25%しか理解出来ない!というわけである。こんな状態だったので、筆者の場合むしろアメリカ人との立食パーティの方がよく話が通じ(単位が出て来ないので)気が楽だったのを覚えている。

さて、こうした問題も米国での滞在が一年、二年と過ぎるにつれ次第に少なくなっていく。今後も、言葉だけでなく、単位系でもバイリンガルの領域に少しでも近づけるよう努力したい。尚、蛇足ながら米国でもメートル法の導入が徐々に行なわれつつあり、筆者の子供達も当地の小学校で両方の単位系を勉強している。